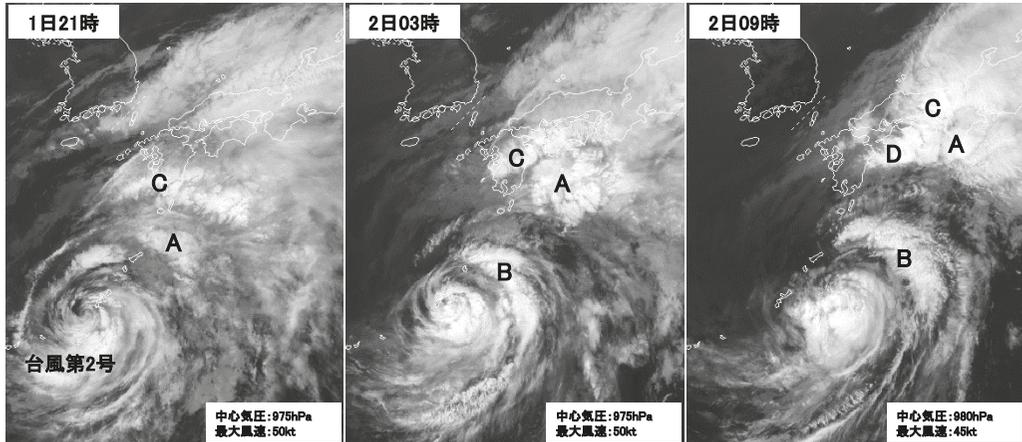




今月のひまわり画像—2023年6月

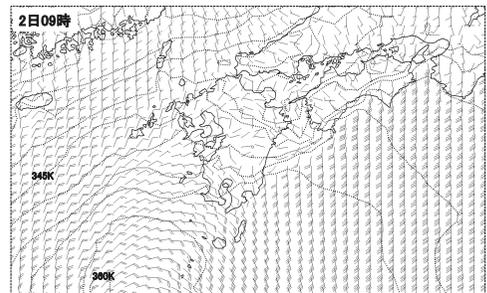
台風第2号の北東象限で発達した対流雲域



第1図 2023年6月1日21時～2日09時（日本時間）の6時間毎の台風第2号付近における衛星赤外面像（記号A～Dについては本文参照，台風の中心気圧，最大風速（1kt \approx 0.51m/s）は速報値）。

第1図は2023年6月1日21時～2日09時（日本時間）の6時間毎の台風第2号付近における衛星赤外面像である。すでに発達ピークを過ぎていた第2号は海面水温及び海洋貯熱量の比較的低い日本の南海上に進んだ上に、対流圏上部のトラフ後面の乾燥した空気の影響を受け、雲域の円形度も失われていた。また、大型台風の衰弱期における構造の変化に伴い、アウターバンド付近で発生し、台風から分離するかのようになら進みながら発達した雲域A、B（同図）を確認できる。一方、雲域C（同図）は西日本付近にほとんど停滞していた前線に概ね対応していた。

ここで、2日午前の四国沖付近の環境場に目を向けると、上中層は寒気を伴った深いトラフの前面の分流場に位置していた（図略）。下層では台風周辺の暖湿な南寄りの風と瀬戸内海から豊後水道を吹き抜ける北寄りの風による収束が顕著（第2図）で、等相当温位線が密集している日向灘～土佐湾付近で雲域D（第1図）が発生し、次第に上述の雲域A、Cと併合しながらスケールの大きい雲域となり、東日本に進んだ。この雲域D、A、Cからなる巨大な雲域の雲頂高度の推移を T_{BB} （等価黒体温度）で見ると、同日09時40分に高知県中部付近で最も低く、約 -76°C （高度約14kmに相当）となっていた。また、この巨大な雲域内では複数



第2図 2日09時の西日本付近におけるLFM（気象庁局地モデル（初期値：同日06時）による975hPa面の相当温位（3K毎）、風（長い矢羽根が10kt（1kt \approx 0.51m/s））の分布図。

のメソ低気圧が顕在化し、それぞれに対応した線状降水帯が強化されていた。このため、2日昼前～3日未明、四国、近畿、東海、関東甲信地方では記録的な大雨となり、高知県土佐清水市三崎では10時20分までの3時間降水量が213.5mmとなるなど、降水量の通年の極値が更新された地点が多く出た。この大雨の影響により各地で土砂崩れなどの災害が発生し、全国の死者・行方不明者は8名（同月26日総務省消防庁情報）となった。また、東海道新幹線が3日正午まで運行見合わせになるなど、交通機関も混乱した。

（気象庁大気海洋部予報課 木下 仁）